

令和元年6月19日現在

機関番号：11601

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2015～2018

課題番号：15K04403

研究課題名（和文）東日本大震災後の福島における国語科教育モデルの構築

研究課題名（英文）Building a Japanese-language Class Model in Fukushima Following the Great East Japan Earthquake

研究代表者

佐藤 佐敏（SATO, Satoshi）

福島大学・人間発達文化学類・教授

研究者番号：10510167

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、東日本大震災後の福島における国語科教育モデルの構築を目指すプロジェクト研究であった。プロジェクトを遂行するために、県内の教員が情報共有できる「福島国語の会」を発足し、全85回、述べ1,769名の参加によってその定例化を図ることができた。

また、構築されたシステムを活用し、地域密着型の国語科教育学、国語科内容学の一部を構築した。福島大学国語教育文化学会にて3回の国語教育実践交流会を開催し、その実践研究を口頭発表するとともに、福島における国語科内容学として単元開発を行い、その成果を「東日本大震災後の福島における国語科モデルの構築（Ⅰ）（Ⅱ）」として提案した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究プロジェクトによって、福島県内の教員間、大学（研究・理論）と現場（実践）との緊密なネットワークが構築され、国語科教育に関する地域特有の課題が共有されることにより、現職教員の教育研究能力や研修指導能力の向上に貢献することができた。また、本研究では被災地域の様々な問題に配慮しながら「復興の未来」を考える教材開発や、地域を巻き込んだ教育実践を行った。本プロジェクトでは、新たな教材開発を行うことにより、福島に住む子どもたちに対して文学の力を借りて心の痛手からの回復を図ることを試行した。原発問題を今なお抱える当該県の国語科教育の充実に一定の成果をあげたと判断している。

研究成果の概要（英文）：The aim of this research project was to construct a model for Japanese language arts education in Fukushima after the Great East Japan Earthquake. To conduct this project, we launched the Fukushima Japanese Language Society for teachers in the prefecture to share information and successfully established a regular event; the event has been held on 85 occasions, and a total of 1,769 people have participated. By using the constructed system, we partially built a model for community-based Japanese language arts pedagogy and educational content. This practice-oriented research was presented as part of the Fukushima University Japanese Language Education and Culture Society. In addition, units were developed for Japanese language arts education in Fukushima at a meeting to exchange information and ideas on practices in Japanese language arts education. The results were presented in “Constructing a Post-Great East Japan Earthquake Fukushima Japanese Language Arts Model (I) (II)”.

研究分野：国語科教育学

キーワード：福島 教育ネットワーク 国語科内容学 学習指導 授業研究 教材開発

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

国立大学の国語科教育分野において、近年、各地域の国語科にかかわる活動をその固有性(以下、国語科教育の地方性と称する)の観点から改めて見直そうとする動向が見られる。とりわけ、震災以降の東日本の大学が担う研究・教育の地域連携と地域還元的重要性とニーズはますます高まりを見せている。弘前大学教育学部国語講座編『太宰へのまなざし—文学・語学・教育—』(2013)、東北大学方言研究センター『方言を救う、方言で救う—3.11 被災地からの提言—』(2012)、山形大学人文学部編『遠い方言、近い方言—山形から世界まで—』(2012)などは東北に所在地を置く大学から震災後に発信された国語関連分野の成果である。本研究では、地域密着型の国語科教育学・国語科内容学を整備し、それらの成果を改めて発信する形での国語科教育の地方性に研究の射程を絞る。震災以降の福島において、未だこの国語科教育の地方モデルは確立されておらず、地域と教育現場に根ざした教育ネットワークの確立と緊密な教育実践および研究交流の場の構築は急務といえる。

震災後の福島では、地域コミュニティが断絶され、随伴して子どもたちの教育環境の断絶も危惧される。このような福島が有する地域的特殊性を考慮すると、従前の個々の研究と教育活動を総合的に結び付け、さらに小中高等学校教員との連携をこれまで以上に強力に進める必要がある。本研究課題は、震災後の福島で、新たな国語科教育モデルの構築を目指すものである。

2. 研究の目的

本研究は、福島大学人間発達文化学類所属の国語科教育担当が福島県内の国語科教員と協同し、東日本大震災後の新たな福島の国語科教育モデルの構築を目指すプロジェクト研究である。プロジェクトを遂行するために、県内国語科教員のネットワークを組織し、恒常的に教員が情報共有できるようなシステムを構築する。また、構築されたシステムを活用し、大学教員や現職教員相互の協同的研鑽を通して、福島における地域密着型の国語科教育学、国語科内容学としての具体的な実践を提案する。

3. 研究の方法

[平成27年度]まず、震災後の福島県内の国語科教育に関する資料を収集・分析する。また、他地域における、地域素材を基にした国語科教育の在り方についても調査する。福島県内国語科教員のネットワークを構築する素地を耕す。

[平成28・29・30年度]調査の内容を分析・精査し、福島県における国語科教育の現状を把握する。また、国語科教員のネットワークを構築している事例を調査し、ネットワークシステムを強固なものとする。そのネットワークを基にして研究会等で国語科教育に関する当県の問題や情報を共有する。そして、これまでに浮上した課題を踏まえた地域密着型の国語科教育学、国語科内容学を構築する。具体的には、具体的な教材開発を行い、それを実践、分析、整理することで研究成果の発信を行う。

課題把握とネットワーク構築から応用的実践の提案へと段階的に移行する計画である。

4. 研究成果

本研究は、東日本大震災後の福島の国語科教育モデルの構築を目指すプロジェクト研究であった。プロジェクトを遂行するために、県内の教員が情報共有できる「福島国語の会(小学校部会)(中学校部会)(高校部会)」を発足し、全85回、述べ1,769名の参加によってその定例化を図った。また、構築されたシステムを活用し、地域密着型の国語科教育学、国語科内容学の一部を構築した。

ここでは、国語科内容学として単元開発を行った二つの研究成果を報告する。

(1)「震災写真集作成の国語科単元開発—東日本大震災後の福島における国語科教育モデルの構築()—」

本単元開発の概要

本研究では、「東日本大震災の記憶の希薄化を防止する単元」として、「震災写真集を作成する」という単元を開発し、情報リテラシーの涵養とコミュニケーション能力の育成を図った。そして作成した写真集を他校の生徒と交流することで、記憶の希薄化を防止することを企図した。また、話し合いをメタ認知させる活動を取り入れることで、この二つの能力の向上を図った。

本単元開発の目的と方法

中学校国語科の授業において生徒たちに、東日本大震災の写真集を編集させ、当時の思いを再生し震災の記憶を希薄化させない意識を持たせることをねらった。次に、筆者らは、写真集を制作するための編集会議を充実させることで、現在子どもたちに求められているコミュニケーション能力を高めることを計画した。編集会議では、互いに納得解を得て合意していく過程で、自説を論理的に説明する表現力が求められるとともに、他者の意見と自説の相違点を明らかにして着地点を模索する高度なコミュニケーション能力が必要となる。グループコンセンサスを求めてインタラクティブに話し合う能力は、合意形成能力として習得すべき重要な国語科の技能である。

福島第一原子力発電所の事故のような災害を二度と繰り返さないためにも、また事故処理情報を正確に把握して処理状況を監視していくうえでも、他者の説明を曖昧な理解のまま同意し

てしまったり、摩擦を恐れて自説を相手に語る意欲を失ったりすることは避け、納得解を求めて他者と対話するタフな能力を身に付けさせたい。

授業実践の概要

第1時 いろいろな写真集を分析し、その特徴をとらえる。

第2時 編集するために必要な作業内容と作業方法を理解する。

第3～6時 表紙についての編集会議をする。

第7時 写真集のコンセプトをもとに相互評価する。

第8時 単元を通して学んだことをまとめる。

本単元開発の成果（詳細は下記の掲載論文を参照願いたい）

【震災の記憶の希薄化を防止すること】

時の経過に沿って記憶の希薄化が進行することは当然のことであり、避けられない。また、記憶が希薄化したほうがよい場合もあるであろうし、悲惨な記憶のフラッシュバックが起こる子どもたちには特段の配慮も必要である。しかし、数年に1回は本実践のように、その時の恐怖、辛さ、心の痛み、人の温かさといった様々な思いを共有し合うことは無用な学習とはなるまい。その歴史的分岐点を確認し現在の自分の立ち位置を確認する作業を行うことは、その後の人生の眺望の明度を上げてくれるであろう。編集した写真集を手にした他校の生徒が「悲しいことも嬉しいことも一生忘れずに私も後の世代に伝えていこうと思いました。」と記述した感想には、過去の思いを再生したからこそ未来に向かおうとする決意と覚悟が滲んでいる。

福島第一原子力発電所の処理問題が終結していない福島に育つ生徒たちには、震災の風化を防止するうえで、こういった実践を引き続き行っていくことの意味は大きい。

【情報リテラシーの涵養について】

震災事故処理の経過を精確に監視するうえでも、福島の国語科教育において、児童生徒の情報リテラシー涵養の方途を探ることは急務である。

写真を選定する際に生徒たちは、序文の言葉や写真の細部の描写、風景の色彩などを摘出して根拠を述べていた。そして、その根拠に理由付けをすることで、印象批判にならない話し合いを組織していた。「なんとなく、この写真がづらい」「この写真の雰囲気がかたまり」といった曖昧な意見ではなく、画像情報学的に読み取る能力が発揮されていた。

【コミュニケーション能力の育成について】

写真集の編集会議において発言意図表示手札を活用することは話し合いをリアルタイムでモニタリングすることに有効であった。その結果、話し合いのフリーライダーも出現せず、インタラクティブに合意形成が図られた。また、自己評価表を活用して自身の話し合いを振り返ることは、話し合いの技能の向上を自覚することに有効であった。このように自己の話し合いをメタ認知する方法を用いたことにより、他者を尊重しながら、感情的にならずに合意形成を図るコミュニケーション能力を高めることができた。

【国語科教育モデルの構築について】

本研究は、大学附属教員と大学教員が協働して、新規の単元を開発した試行的研究である。大学附属教員が大学教員の理論と方法論を信用していたことと、大学教員が大学附属教員の実践力を信頼していたことが本実践の成果を導いた。「東日本大震災後の福島における国語科教育モデルの構築」という研究課題の一環で行った本実践は、国語科教育ネットワークの確立の1つの典型的なモデルとなる実践になったと言えるであろう。

(2) 「復興の未来を読む国語科単元開発 –東日本大震災後の福島における国語科教育モデルの構築()–」

問題の所在

福島では津波被害に加え、福島第一原子力発電所の事故から避難するため故郷を離れた多数の住民がおり、現在もその多くが帰郷できていない。このような東日本大震災後の県外避難者の避難状況や、子どもたちの故郷への帰還状況を踏まえて、地域の活性化や故郷への愛着心を高めることを目的とした国語科授業を組織するとすると、どのような教材を用いて、どのような授業を行うことが望ましいのであろうか。

一般的に、被害に遭ってない人間が被害について語ることは禁忌とされる。傷を負った人にしかその傷の本当の痛みは分からないからである。この思いが強くなると被災問題は傷を負った人たちだけが語ることを許される聖域となる。

実際、東日本大震災後の平成27年度版小学校国語科教科書で、東日本大震災を扱っている教材と、広く災害を扱っている教材を調査したところ、災害を題材とした教材は、4社7つであった。しかし、東日本大震災の体験を直接扱ったドキュメンタリーやそれをモチーフとした物語は1つもない。これは、様々な被害に遭った子どもたちの心の傷を広げる危険性があることを配慮した結果であろう。

本単元開発の目的と方法

本研究では、東日本大震災後の被害に遭った地域の子どものためにどういった文学作品を教材として提供し、どのような授業を組織することに意味があるのかを明らかにする。具体的には、故郷を取り戻す復興の未来を考える教材を取り上げ、授業実践を提示する。教材とするのは小林豊の執筆した二つの絵本「世界一美しいぼくの村」と「世界一美しい村へ帰る」である。作品「世界一美しい村へ帰る」の最大の仕掛けは、「何もかもはかいされた村を、なぜ『世界

「美しい村』と言ったのだろう」という問いである。

この作品の仕掛けに対する納得解を探る学習活動により、「えだ先に、小さなつぼみがついていました。」という叙述に気付かせ、東日本大震災の爪痕の残る地域でも、校庭の樹木のえだ先の小さなつぼみに気付いて「未来」を感じる子どもを育てていきたい。はかばかしく政治的かつ技術的に原発事故の復旧が進まなくとも、自然の生命のたくましい息吹を感じることで、力強い「希望」を感知するセンサーを高めたい。

本単元開発の成果（詳細は下記の掲載論文を参照願いたい）

福島には「復興」「希望」「未来」「友達」「思い出」といった美しい言葉で包括することのできない現実が眼前にある地域もある。原発事故は終焉しているわけではなく、今もなお帰還が許されない地域もある。また、帰還が許されている地域であっても放射線量の心配によって今しばらくは故郷への帰還者の増加が望めない地域もある。東日本大震災に関する思いは被害を受けた人の数だけ存在し、その心の傷は個別的である。決して汎化して捉えることはできない。しかし、授業で本モチーフを扱う際に、個々の思いに共振する個別の教材を用意することは叶わない。このナイーブかつデリケートなモチーフを教材にするのは困難が伴う。

本研究では、今もなお帰郷できない人が多くいる福島の地で取り扱う価値がある教材を取り上げ、その指導法の1つを提案した。児童たちは実践者たちの意図を遥かに上回り、作品の仕掛け に対して、文章中から様々な叙述を拾い復興の意思を確認していった。

実践したのは被災状況がさほど大きくない地域の学校であった。実際に被害の大きかった海岸線の学校や事故を起こした原発に近い学校で今回開発した実践がどのような様相を呈するのかは、未知数であり、実践するには冷静なる勇気が必要である。子どもたちの被災状況を見極めたうえで、本単元を慎重に実践し、その結果を丁寧に分析していくことが必要であろう。

そして、様々な現実があることを踏まえたうえで、福島の子どもたちの未来に繋がる教材をさらに開発していくことが今後の課題である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計12件)

白石海里、佐藤佐敏、アニメーションの短期集中型プログラムの開発—「朝読書」の時間を活用した実践の成果と課題—、言文、査読無、第66号、2019、横14-27

<https://www.lib.fukushima-u.ac.jp/repo/repository/fukuro/R000005271/14-27.pdf>

佐藤佐敏、復興の未来を読む国語科単元開発—東日本大震災後の福島における国語科教育モデルの構築()—、地域創造、査読有、第30巻第1号、2018、19-30

<https://www.lib.fukushima-u.ac.jp/repo/repository/fukuro/R000005188/18-306.pdf>

澁澤尚、体験型学習講座『福島漢字探検隊』の7年間—兼ねて初等漢字教育の問題点を論ず—、地域創造、査読有、第30巻第1号、2018、3-17

<https://www.lib.fukushima-u.ac.jp/repo/repository/fukuro/R000005187/18-305.pdf>

澁澤尚、体験型学習講座『福島漢字探検隊』の7年間—兼ねて初等漢字教育の問題点を論ず—、言文、査読無、第65号、2018、横5-10

<https://www.lib.fukushima-u.ac.jp/repo/repository/fukuro/R000005252/14-23.pdf>

高橋正人、東日本大震災後の福島における国語科教育モデルの構築に向けて—土地・記憶・人 言葉との出会いを通して—、言文、査読無、第65号、2018、横11-28

<https://www.lib.fukushima-u.ac.jp/repo/repository/fukuro/R000005253/14-24.pdf>

上野友寛・井實充史、中学校における和歌の読み方の獲得を目指した授業実践—「景物+心情」の抒情様式の理解を通して—、福島大学人間発達文化学類論集教育・心理学部門、査読無、第27号、2018、74-88

<https://www.lib.fukushima-u.ac.jp/repo/repository/fukuro/R000005134/16-185.pdf>

佐藤佐敏、身体反応に基づく「海のいのち」の教材論—遡及的推論と叙述の響き合い—、福島大学人間発達文化学類論集・教育心理学部門、査読無、第25号、2017、21-30

<https://www.lib.fukushima-u.ac.jp/repo/repository/fukuro/R000005029/16-159.pdf>

井實充史、系統性を考慮した中学校・高校和歌教材の開発—鑑賞の土台となる抒情様式の理解を目指して—、福島大学人間発達文化学類論集・人文科学部門、査読無、第26号、2017、74-88 <https://www.lib.fukushima-u.ac.jp/repo/repository/fukuro/R000005093/16-178.pdf>

澁澤尚、故事成語教材による系統的漢文教育の試み—「推敲」から漢詩の指導へ—、言文、査読無、第64号、2017、1-16

<https://www.lib.fukushima-u.ac.jp/repo/repository/fukuro/R000005010/14-13.pdf>

高橋正人、東日本大震災後の福島における国語科教育モデルの構築に向けて—震災体験の想起、表現及び教材化をめぐる—、言文、査読無、第64号、2017、横20-31

<https://www.lib.fukushima-u.ac.jp/repo/repository/fukuro/R000005012/14-15.pdf>

佐藤崇史・佐藤佐敏、震災写真集作成の国語科単元開発—東日本大震災後の福島における国語科教育モデルの構築()—、地域創造、査読有、第27巻第2号、2016、4-15

<https://www.lib.fukushima-u.ac.jp/repo/repository/fukuro/R000004864/18-250.pdf>

前林伸也・佐藤佐敏、根拠・理由・主張に基づく説明文指導の開発、福島大学総合教育研究センター紀要、査読有、第21号、2016、9-16

<https://www.lib.fukushima-u.ac.jp/repo/repository/fukuro/R000004941/19-230.pdf>

〔学会発表〕(計6件)

佐藤佐敏、復興の未来を読む国語科単元開発—東日本大震災後の福島における国語科教育モデルの構築()—、福島大学国語教育文化学会前期学会、2018

藤田亮洋、佐藤佐敏、非連続型テキストの読解方略—出典とタイトルに着目する授業プログラムの開発—、日本教育実践学会、2018

井實充史、中学校和歌教材の開発と実践—表現の工夫(修辞技法)を中心に—、福島大学国語教育文化学会後期学会、2017

澁澤尚、体験型学習講座『福島漢字探検隊』の7年間、福島大学国語教育文化学会後期学会、2017

高橋正人、東日本大震災後の福島における国語科教育モデルの構築に向けて—土地・記憶・人言葉との出会いを通して—、福島大学国語教育文化学会後期学会、2017

佐藤佐敏、叙述の響き合いと作品の秩序—作品「海のいのち」の授業における言語主義を超えて—、全国大学国語教育学会、2016

〔図書〕(計2件)

佐藤佐敏、明治図書、国語科授業を変えるアクティブ・リーディング 読みの方略 の獲得と物語の法則 の発見、2017、142

佐藤佐敏、学事出版、5分でできるロジカルシンキング簡単エクササイズ、2016、111

6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：井實 充史

ローマ字氏名：IJITSU Michifumi

所属研究機関名：福島大学

部局名：人間発達文化学類

職名：教授

研究者番号(8桁)：20277776

研究分担者氏名：澁澤 尚

ローマ字氏名：SHIBUSAWA Hisashi

所属研究機関名：福島大学

部局名：人間発達文化学類

職名：教授

研究者番号(8桁)：60344826

研究分担者氏名：中川 祐治

ローマ字氏名：NAKAGAWA Yuji

所属研究機関名：福島大学

部局名：人間発達文化学類

職名：准教授

研究者番号(8桁)：70352424

研究分担者氏名：高橋 由貴

ローマ字氏名：TAKAHASHI Yuki

所属研究機関名：福島大学

部局名：人間発達文化学類

職名：准教授

研究者番号(8桁)：90625005

研究分担者氏名：高橋 正人

ローマ字氏名：TAKAHASHI Masato

所属研究機関名：福島大学

部局名：人間発達文化学類

職名：特任教授

研究者番号(8桁)：00809189

研究分担者氏名：渡邊 州

ローマ字氏名：WATANABE Syu

所属研究機関名：福島大学
部局名：人間発達文化学類
職名：特任教授
研究者番号(8桁): 40751756